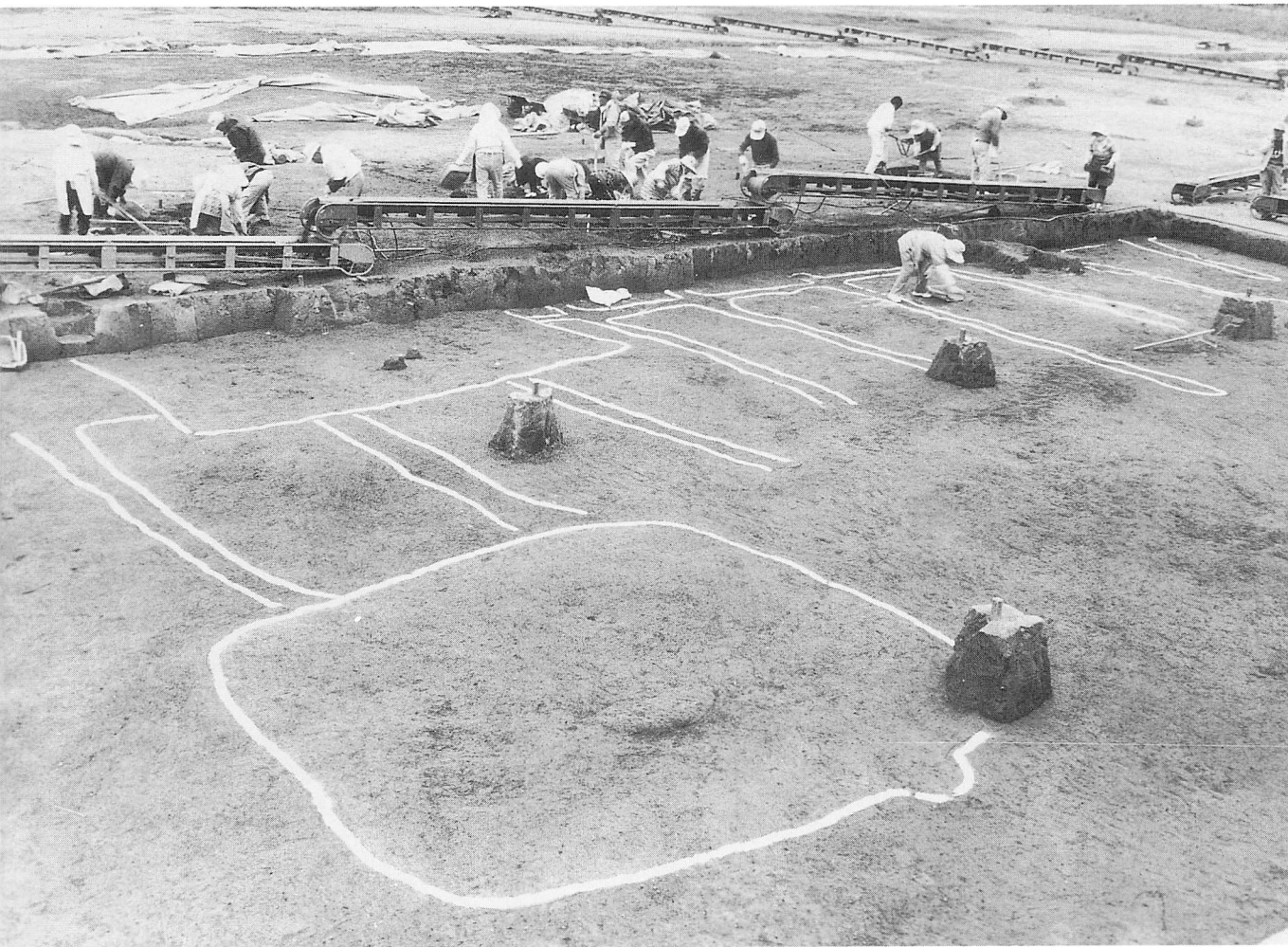


村前東A遺跡概報2

一般国道52号線(甲西道路)改築工事・中部横断自動車道建設
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(Ⅰb区・Ⅱb区・Ⅲ区・Ⅳ区)



1995.3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

序

村前東A遺跡は、現在の山梨県中巨摩郡檜形町と若草町との境界地域に広がる遺跡で、甲府盆地西部の御勅使川扇状地の扇端部に位置しております。

本遺跡は、これまで一般国道52号線(甲西道路)改築工事にもなっており、1990年度と1993年度の2回に渡り調査が行われ、今年度の中部横断自動車道建設にもなう調査が第3次調査にあたります。本書はこの第3次調査の概要をまとめたものであります。

今年度の調査は、甲西道路部分をⅠb区・Ⅱb区、インターチェンジ予定部分をⅢ区・Ⅳ区として実施しました。その結果、各地区において江戸、平安、古墳、弥生時代の文化層4面が明らかにされております。

中・近世の遺構では、土坑29基、溝18条、洪水跡1ヵ所、畠状遺構2ヶ所があり、とくに土坑は近接する加賀美地区の瓦生産に関わる粘土採取坑と推定されるものもあります。平安時代の遺構では、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡2棟、溝7条が確認され、該期の集落構造が徐々に明らかになりつつあります。古墳時代の遺構は、平安面の50～100cm下層に展開し、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡5棟、竪穴状遺構1基、溝3条、土坑8基、ピット74基など濃密な遺構群が検出されております。また今回の調査ではこれまでの調査で始めて、弥生時代の水田跡が存在することが明らかにされ、御勅使川扇状地の形成過程を解き明かす重要な情報が得られました。

この概報が多くの方々にご利用いただければ幸いです。末筆ながら、種々のご指導、ご協力を賜った関係各位、並びに直接調査に参加いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1995年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚初重

例言

目次

1. 遺跡と周辺環境
2. 調査区の設定
3. 調査経過
4. 今年度調査の概要
5. Ⅰb区の遺構と遺物
6. Ⅱb区の遺構と遺物
7. Ⅲ区の遺構と遺物
8. Ⅳ区の遺構と遺物
9. 自然科学分析

1. 本書は1994(平成6)年度に実施した山梨県中巨摩郡檜形町、若草町内に所在する村前東A遺跡(むらまえひがしAいせき)の発掘調査の概報である。
2. 調査は中部横断自動車道建設工事にもなっており、日本道路公団から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、Ⅰb区・Ⅲ区を中山誠二・小林公治、Ⅱb区・Ⅳ区を三田村美彦・佐野和規が担当した。
4. 本書の執筆・編集は、上記の4名が担当し、文責は文末に明記した。
5. 本報告書に関わる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 自然科学分析の結果の概要は、(株)パレオ・ラボの吉川純子氏、および樋泉岳二氏より玉稿を賜った。

1. 遺跡と周辺の環境

村前東A遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町十五所字村前東から同若草町十日市場にかけての広がりを持ち、甲府盆地の西部に形成された御勅使川扇状地の扇中央部から扇端部にかけて位置する(第1図)。標高は約280メートルを測る。

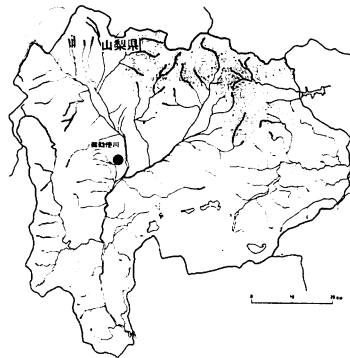
この周辺一帯は、砂礫の堆積が厚く地下水位が低いため稲作には適さず、戦前は桑栽培による養蚕、戦後になって果樹栽培が急速に進行していった地域である。遺構は、そうした畑地となる砂礫層を取り除いた地表から約1メートル以下のところにおいて、はじめて確認される。

周辺の遺跡は、近年両町で相次いで行われた分布調査によって、櫛形町で239ヶ所、若草町で86ヶ所を数える。旧石器から縄文時代にかけての遺跡は、本遺跡の背後にそびえる櫛形山のふもとをなす市之瀬台地などの台地上や、台地と扇状地の境界にあたる緩斜面に多く分布する傾向をもち、時代が新しくなるにつれ盆地低部への開発、居住傾向が強くなる。

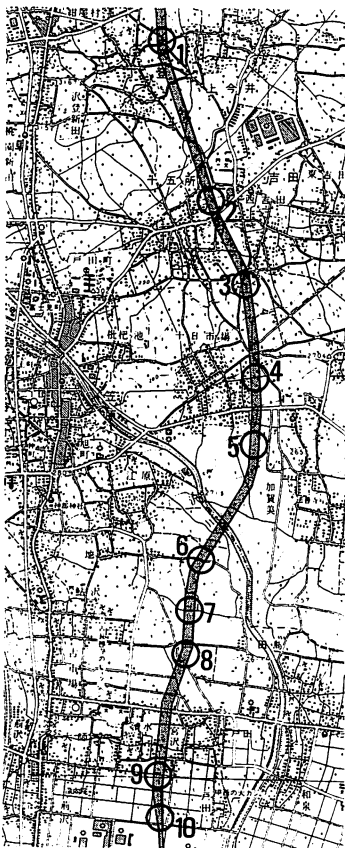
中部横断自動車道にかかわる遺跡としては、1989年、1990年の試掘調査によって、現在のところ、本遺跡を含め10ヶ所が確認されている(第2図)。それらは櫛形町、若草町、甲西町の三町にわたる。これらの遺跡が展開する地域は大きく2つに分けることができる。すなわち、御勅使川扇状地扇中央部から扇端部にかけての微高地に広がる乏水地域と、それより南方に広がる湧水地域である。遺跡の内容として、前者は主に集落跡などの居住地として展開し、後者は水田などの生産域と分類することができる。

中部横断自動車道にかかわる遺跡としては、1989年、1990年の試掘調査によって、現在のところ、本遺跡を含め10ヶ所が確認されている(第2図)。それらは櫛形町、若草町、甲西町の三町にわたる。これらの遺跡が展開する地域は大きく2つに分けることができる。すなわち、御勅使川扇状地扇中央部から扇端部にかけての微高地に広がる乏水地域と、それより南方に広がる湧水地域である。遺跡の内容として、前者は主に集落跡などの居住地として展開し、後者は水田などの生産域と分類することができる。

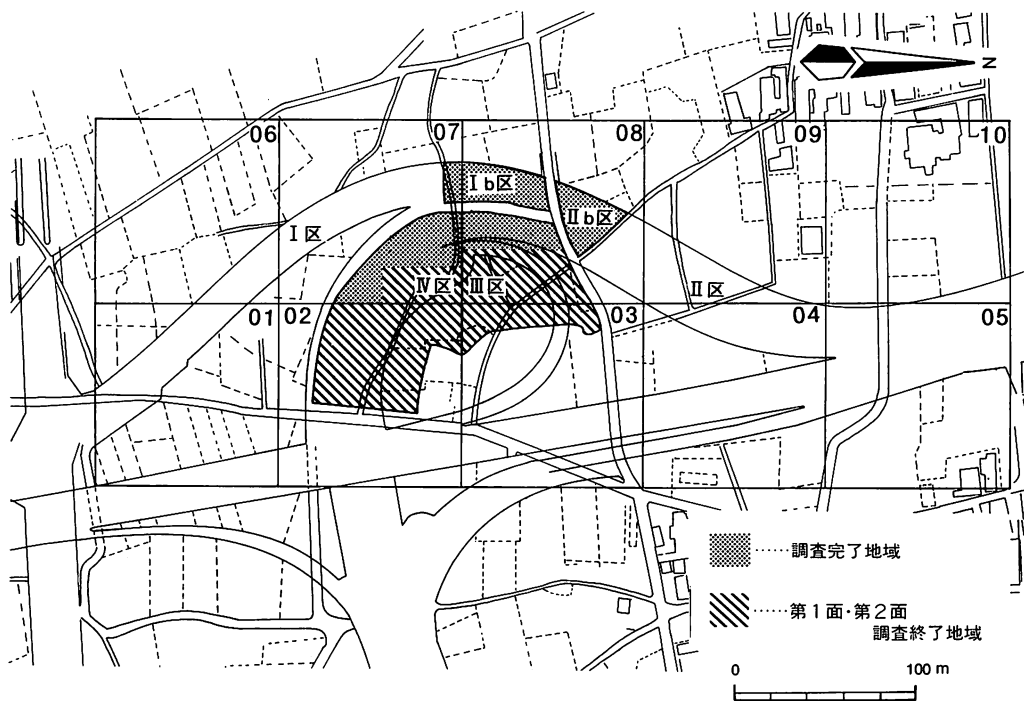
1. セツ打遺跡(近世；溝状遺構等)
2. 十五所遺跡(弥生・古墳；方形周溝墓等)
3. 村前東A遺跡(弥生・古墳・平安・中近世；集落址等)
4. 新居道下遺跡(弥生・古墳・奈良・平安；集落址等)
5. 二本柳遺跡(弥生・古墳・平安・中近世；水田址等)
6. 向河原遺跡(弥生・中近世；水田址等)
7. 油田遺跡(弥生・古墳・奈良・平安；水田址等)
8. 中川田遺跡(弥生？・平安・近世；水田址等)
9. 大師東丹保遺跡(弥生・古墳・平安・中近世；古墳、水田址等)
10. 宮沢中村遺跡(中世・近世；寺院址等)



第1図 遺跡の位置図



第2図 中部横断自動車道上の遺跡群



第3図 調査区位置図

2. 調査区の設定

調査区は、本遺跡のすべての調査予定地域を覆うように、南北500m、東西200mの範囲を一辺100m方眼に区切り、01区から10区の大グリッドを設定した(第3図)。さらに大グリッドを東西南北に20分割し、一辺5mの小グリッドとし、東西方向に東よりAからTまで、南北方向に南より1から20までの番号を付すことにした。グリッドの名称は、頭2桁を大グリッド名、下3桁で小グリッド名を表すことにする。なお、大グリッドの起点となる点は、01の大グリッド南東コーナーとし、国土座標系の $X = -43,180,000$ $Y = -1,520,000$ に位置している。また、方位はグリッドの南北ラインが真北、真南に対応し、磁北と6度東方向にずれる。

3. 調査経過

本遺跡は、1990年度に畑地灌漑用パイプ移設工事に伴う第1次調査が行われ、1993年度は第2次調査として中部横断自動車道本線部の南側をI区、北側をII区として調査を行った。今年度は引き続き、本線部のI区に北接する部分をI b区、II区に南接する部分をII b区として調査し、さらに、中部横断自動車道インターチェンジ部分の北半をIII区、南半をIV区としてそれぞれ調査を行った。なおIII区、IV区の調査区の境界は07大グリッドと08大グリッドを区切るラインおよび02大グリッドと03大グリッドを区切るラインとした。

調査の結果、各区において、弥生、古墳、平安、中近世の各時代に対応する4面の文化層が確

認された。なお、Ⅲ区、Ⅳ区については、その西側部分の調査が完了し、その東側部分では平安・中近世面の調査を終え、弥生・古墳時代面の2面は、来年度以降の調査となる(第3図)。調査は1994(平成6)年4月13日から同年12月26日まで行われ、1995(平成7)年1月から3月まで整理作業を実施した。

4. 今年度調査の概要

ここでは、村前東A遺跡(Ⅰb区、Ⅱb区、Ⅲ区、Ⅳ区)で確認された4面の文化層について、本年度調査全体の概要を、時代順に説明する。なお、調査区ごとの説明は次章以降に譲る。

1) 弥生時代(第4面) (第4図)

最下層の第4面では、弥生時代後期以前の水田跡が確認された。これらの遺構は、後述する古墳時代前期の集落跡と層位的には近接してみられるものであるが、その上層にはわずかに間層が存在する。したがって、この水田跡は弥生時代後期後葉以前の時期に相当するものと判断される。遺構はⅢ区とⅣ区の境界付近に存在し、東側の第4面未調査範囲に向って広がるものと予想される。

水田の区画は大きいもので長さ7m、幅2m、小さいもので長さ2.5m、幅2m程の長方形であり、弥生時代に一般的な小区画水田である。区画の数は34を数える。これらは、第4面の北から南に向う自然地形の緩やかな傾斜に沿って配置されている。

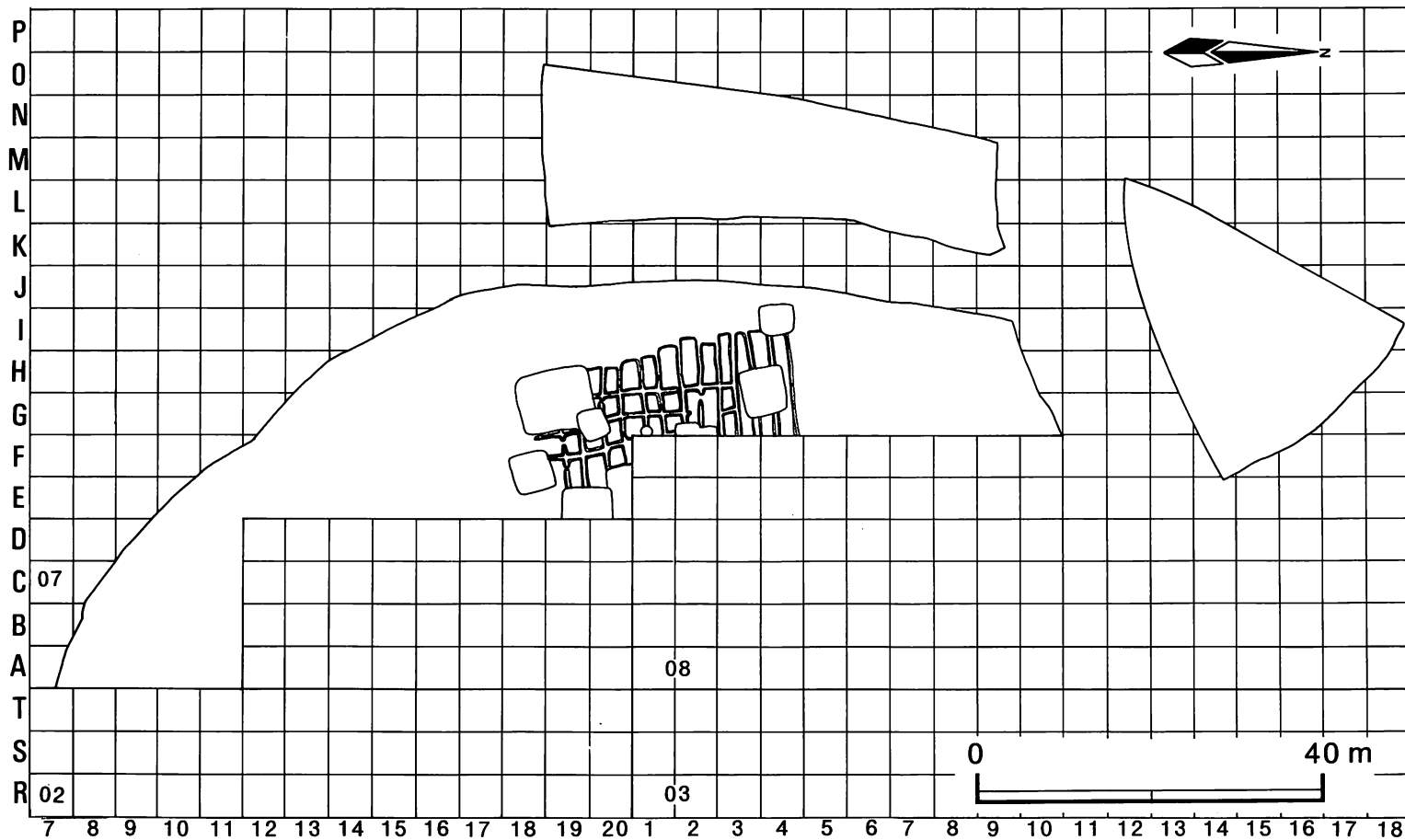
2) 古墳時代(第3面) (第5図)

第3面では、古墳時代前期の集落址が確認された。これらは、第4面の水田の畦畔を切る形で展開する。竪穴住居址はⅠb区で1軒、Ⅱb区で3軒、Ⅲ区で16軒、Ⅳ区で16軒、計36軒が検出された。また、掘立柱建物址はⅢ区で3棟、Ⅳ区で2棟、計5棟が確認されている。

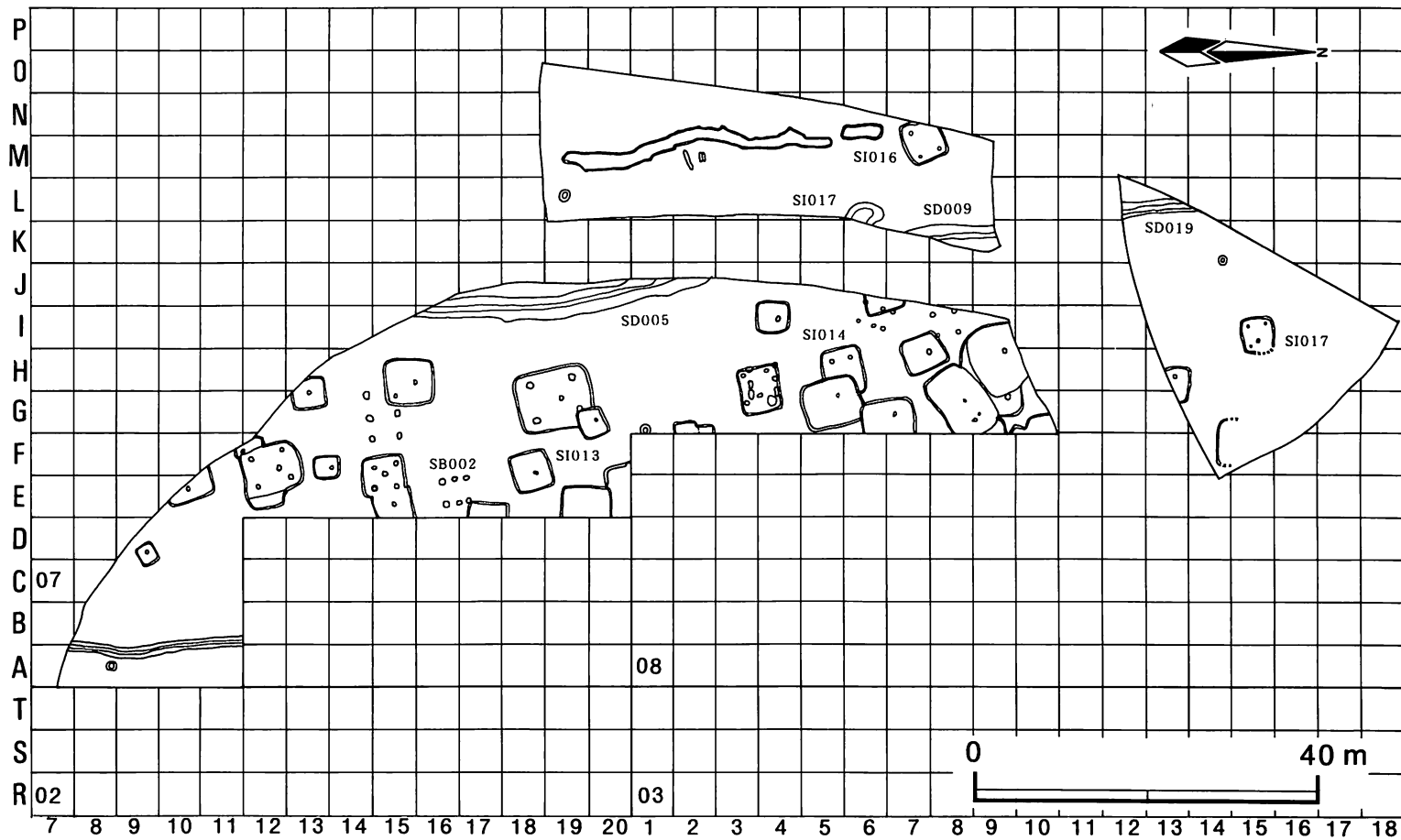
竪穴住居址は、大きいもので一辺が8～9m程、小さいものが一辺が2～3m程で、多くが隅丸の方形プランである。掘立柱建物址は、大型のもので桁行約6mの2×3間、小型のもので一辺約3mの2×2間である。このほか、住居址を取り巻くように溝が3条確認されている。このうち、Ⅲ区、Ⅳ区を貫いて西端に存在する溝は、Ⅰb区北東角の溝さらにⅡb区の西端の溝と同じものであると思われる。そのほか、竪穴状遺構1基、土坑8基、ピット74基、焼土址30ヶ所が検出されている。

これらの遺構群は未調査地域も含めて、付近いったいに広がりをもつことが予測され、古墳時代前期の大規模な集落の存在を示唆している。Ⅲ区、Ⅳ区の東側の来年度調査予定地域には、これらの集落址がさらに展開していくと考えられる。

(佐野和規)



第4図 弥生時代の遺構配置図

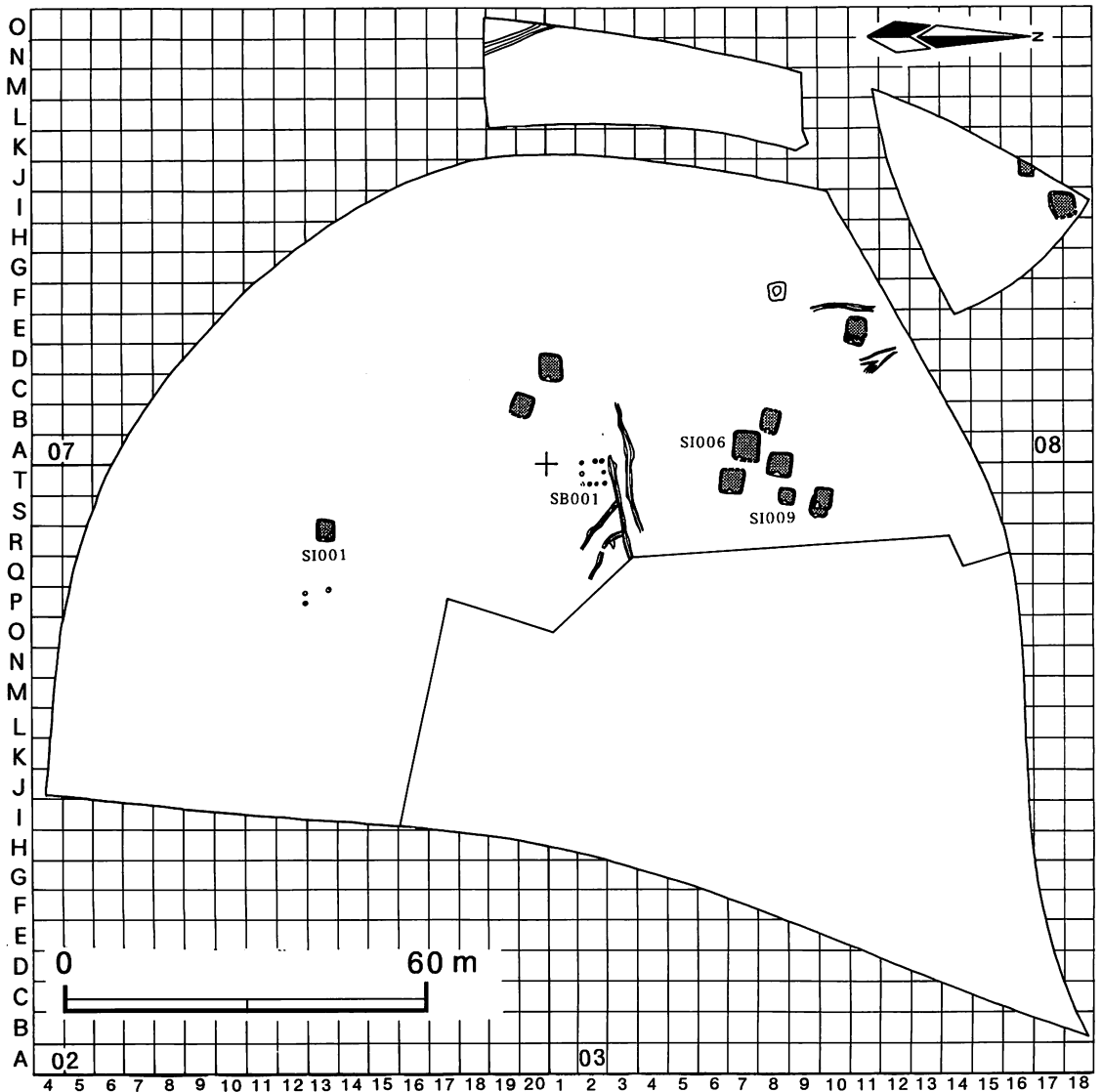


第5図 古墳時代の遺構配置図

3) 平安時代(第2面) (第6図)

今年度の調査で検出された平安時代の遺構は、竪穴住居址14軒、堀立柱建物址2棟、溝8条、竪穴状遺構1ヶ所である。これら遺構の分布密度は全体に希薄であるが、一様に分布するのではなく、いくつかの地点に若干のまとまりをもっているように見受けられる(第6図)。各遺構の詳細な所属時期は未検討であるが、出土遺物からほぼ9～10世紀に入るものと考えられる。

これらの竪穴住居址は、いずれも方位とほぼ向きが揃っており、さらに12軒の内、10軒の住居址では東壁にカマドがつくられている。また、2棟の堀立柱建物址の柱間は、2×3間と1×1間であるが、その桁行方向は両者共にやや西に傾いている。このように、建築物の並びには分布の散漫さとは対称的に統一性が感じられる。

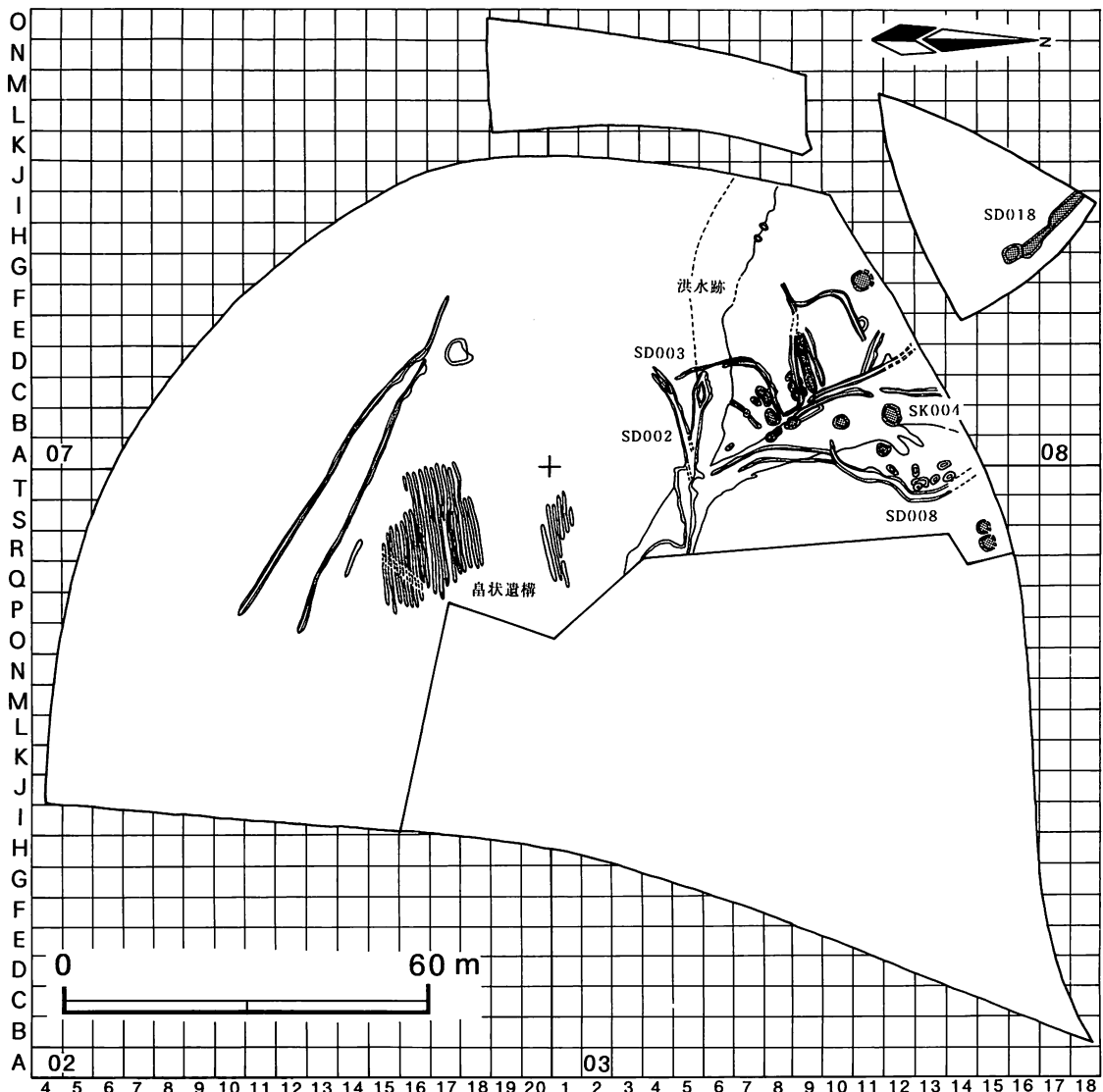


第6図 平安時代の遺構全体図

4) 江戸時代(第1面) (第7図)

江戸時代の遺構は、溝17条、土坑28基、畠状遺構2ヶ所であり、この他に江戸時代後期以前の洪水跡1ヶ所がある。

溝はⅢ区およびⅣ区で確認されているが、その方向がⅣ区で東西方向なのに対し、Ⅲ区では南北方向のものもある。昨年度調査のⅡ区で確認された溝がいずれもほぼ南北方向であり、Ⅲ区の同方向の溝との関連性が問題となろうが、中でも第8号溝とⅡ区第2号溝は同一のものの可能性がある。土坑はⅢ区およびⅡb区で確認されている。その内大型のものは後述するように、粘土採掘坑と考えられるものであるが、Ⅱb区の3基を除けばいずれもⅢ区の北寄りに集中している。この他、畠状遺構がⅢ区とⅣ区のほぼ境付近で確認されている。(小林公治)



第7図 江戸時代の遺構配置図

5. I b区の遺構と遺物

1) 概要

I b区は昨年度調査区のI区の北側に連続する幅16m、長さ50mの地区である。調査の結果、平安時代の溝状遺構1条、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、溝2条、土坑3基、ピット27基が発見されている。

2) 古墳時代の遺構と遺物

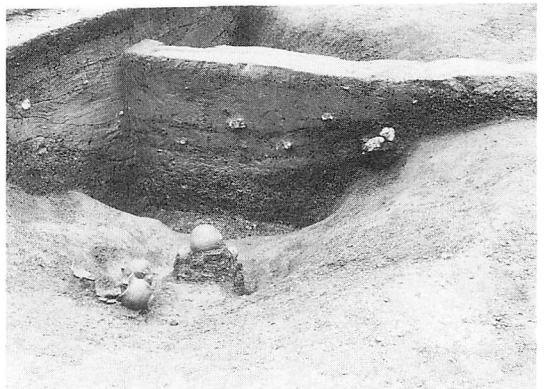
(Pl.1～2)

第16号住居址(SI016)は、調査区北西部に位置し、北西コーナー部が調査区外に延びる。一辺5m程の隅丸方形の竪穴住居址で、ほぼ東西南北に沿って構築されている。内部施設は主柱穴の一部とされるピットが3本が発見されているが、床面の遺存状況が悪くその他の施設は確認できなかった。覆土内には炭化材がわずかに検出されたほか、古墳時代前期の土師器や台石が出土している。



Pl.1 第16号住居址(SI016)

竪穴状遺構(SI017)は、本調査区北東部に検出され、遺構半分がさらに調査区外に延びている。この遺構は、長軸4.5m、短軸2.5m程の不整楕円形を呈し、深さ90cm程のすり鉢状の断面形態を示す。覆土内から完形に近い長頸壺や台付甕が出土している。



Pl.2 竪穴状遺構(SI017)

溝状遺構は、調査区北東端に位置するSD009と調査区中央を南北方向に走るSD010が存在する。SD009は、幅2.8m、深さ90cm程の溝で、I b区のSD019とIV区のSD005に連続する溝と判断される。

3) 平安時代の遺構

本調査区の北側においては後世の氾濫によって平安時代の旧地表面が削平され、中礫を主体とした洪水堆積物が一面に広がりを見せている。調査区南西部においてI区で確認された第1号溝(SD001)が認められている。

(中山誠二)

6. II b区の遺構と遺物

1) 概要

II b区は、昨年度調査したII区の南側の約600m²の地区である(第3図)。本区では3面に渡り文化層が確認され、第1面が江戸時代、第2面が平安時代、第3面が古墳時代に比定される。



Pl.3 II b区全景

2) 古墳時代の遺構と遺物(Pl.4)

古墳時代では、住居址3軒、土坑1基、溝1条、焼土址5ヶ所が検出されている。本区では遺構確認面と覆土の色調が近似しており、遺構確認が難航した。特に住居址は火災等で炭化物、炭化材などが覆土に多量に残存されるような状況でないとプランを明確に確認できなかった。これらの検出された遺構や遺構確認面上層に堆積する当該期の黒色包含層からは、多量の遺物が出土し、そのほとんどが古墳時代前期に比定される甕、壺、高坏、器台などで、東海系の土器も混在している。

住居址の内、調査区の中央部から東寄りで検出された第17号住居址(SI017)は、東西4.5m、南北4mの方形を呈する(Pl.4)。本址は火災を受けたと考えられ、覆土からは多量の炭化物、炭化材が検出された。炉址は住居址中央部より東寄りで検出され、柱穴が3本確認されている。

3) 平安時代の遺構と遺物(Pl.5)

住居址2軒が調査区の北側で確認されている。この内、Pl.5に示した第16号住居址(SI016)は西側が調査区外となり、プランは不明瞭である。カマドは北壁に構築されている。

4) 江戸時代の遺構と遺物

調査区東側で溝状遺構(SD018)が確認されている。一部土坑状に深く掘込まれている箇所があり、粘土採取を目的とした遺構の可能性もある。(三田村美彦)



Pl.4 II b区第17号住居址



Pl.5 II b区第16号住居址

7. Ⅲ区の遺構と遺物

1) 概要

Ⅲ区では4枚の文化層が検出されている。最上層では江戸時代の土坑28基、溝13条が調査区北部に集中して存在し、調査区南側においては江戸時代後期以前の洪水跡と畠状遺構が1ヶ所ずつ確認された。第2面では、平安時代の竪穴住居址12軒、掘立柱建物址1棟、溝6本が存在する。第3面では古墳時代前期の竪穴住居址16軒、掘立柱建物址3棟、土坑1基、焼土址19ヶ所、第4面では弥生時代と推定される水田跡が20面が検出されている。

2) 弥生時代の遺構(第4図、Pl.14)

Ⅲ区南側において水田跡が20面発見された。水田は長辺3～7m、短辺2mほどの長方形を呈する小区画水田で、長軸方向をほぼ東西方向にとって配列されている。畦畔の規模は、幅約30～40cm、高さ20cm前後で、水口施設も数ヶ所で確認されている。水田群の全体的傾斜は北から南へ向かって緩やかな傾斜をなしており取排水の方向を推定することができるが、今回の調査ではこれに伴う水路施設は特定できなかった。所属時期については、今年度調査では時期確定を行う土器資料が得られず正確には限定できないが、堆積構造の検討から弥生時代後期後葉以前の水田跡であると判断される。

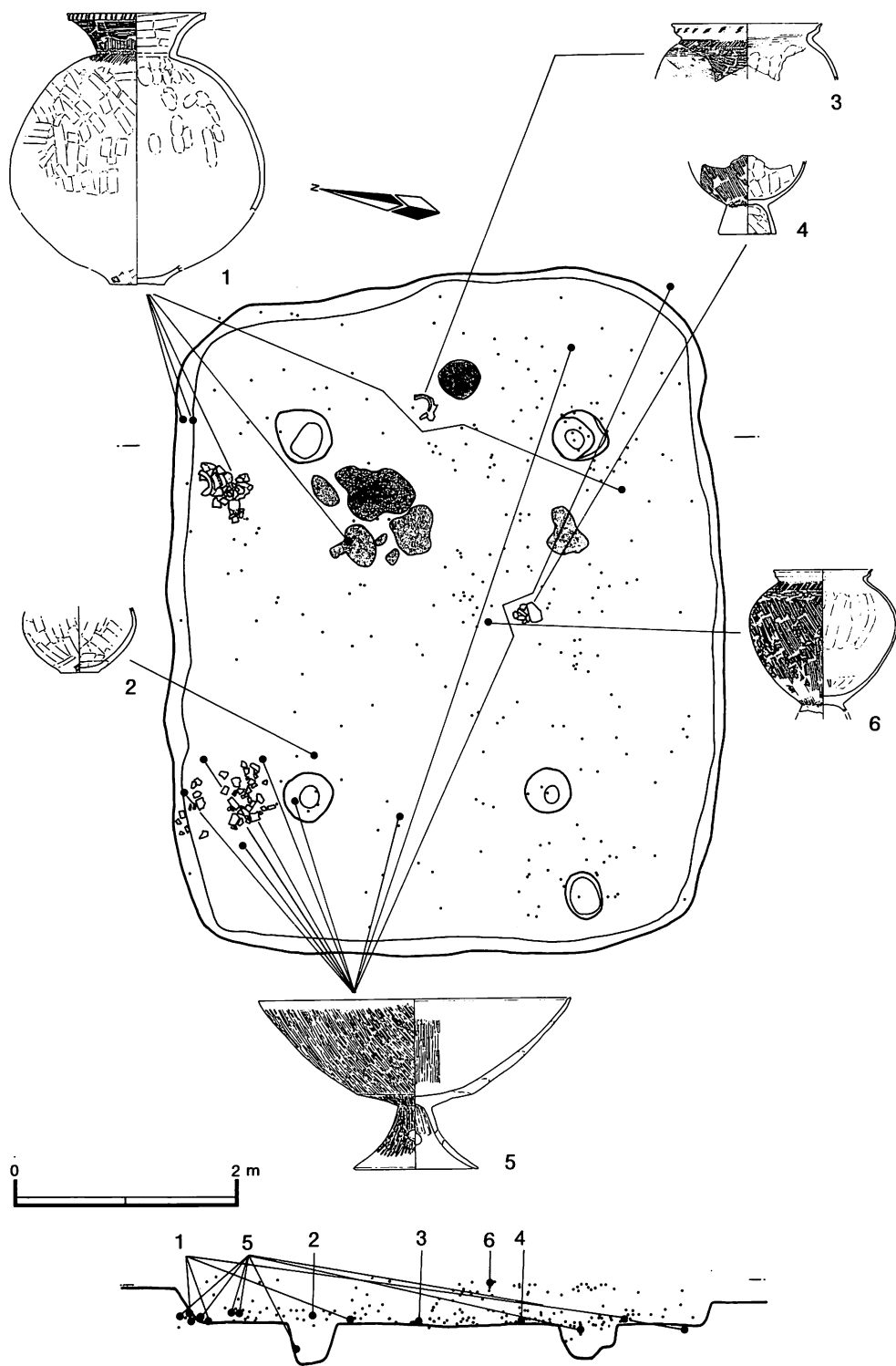
3) 古墳時代の遺構と遺物(第8・9図)

竪穴住居址16軒、掘立柱建物址3棟、土坑1基、焼土址19ヶ所が検出された。該期の住居跡は調査区北側において密集する傾向が認められる。住居跡の平面プランは隅丸の長方形または正方形を呈するものが多く、一辺が4～7m前後である。これらの遺構からは土器のほか若干の鉄製品が出土している。特に土器は弥生6期～古墳時代初頭に位置付けられ、甲府盆地における3世紀後半から4世紀前半の土器様相の変化を捉える上でも重要な資料となりうる。

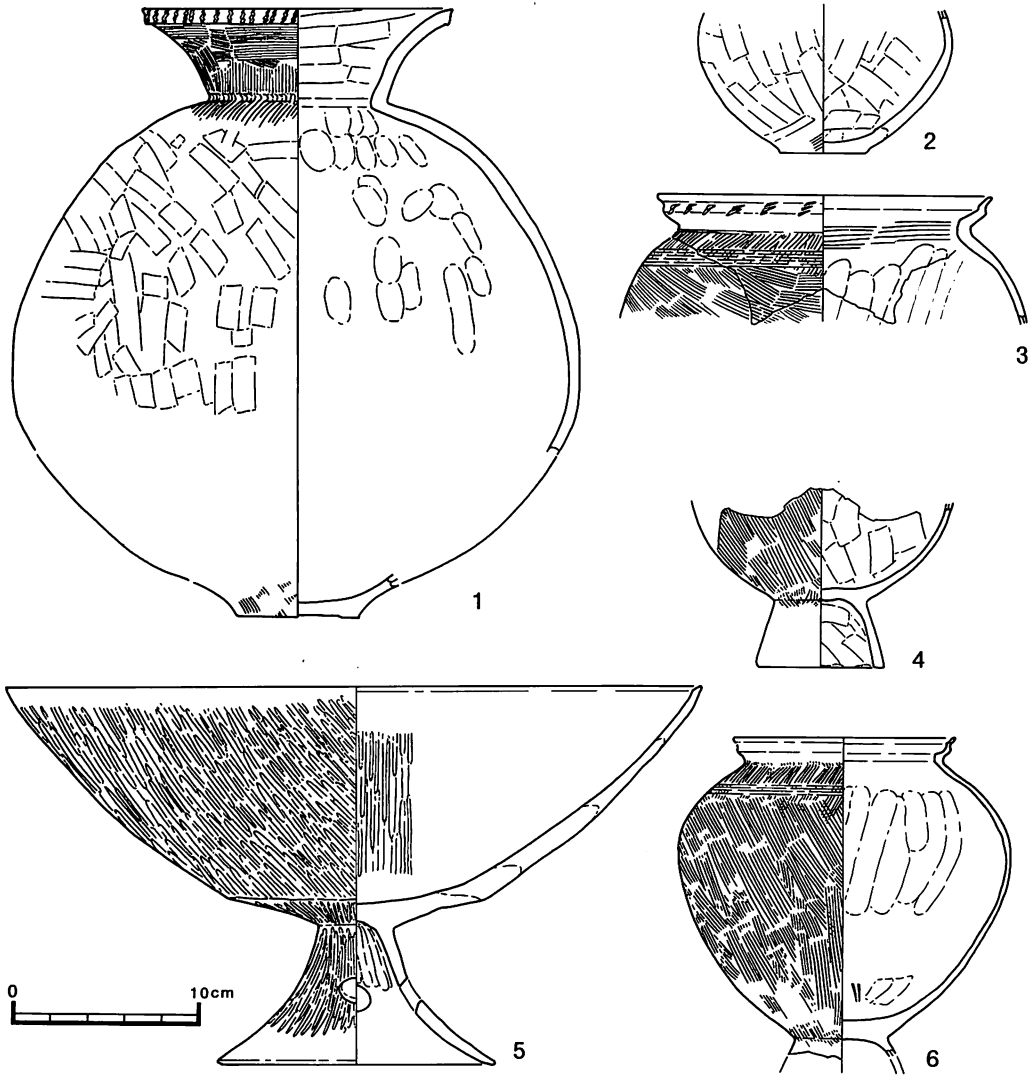
以下では、第14号住居址(SI014)を取り上げ、その概要を見ることにしたい。

この住居址はⅢ区北側の08区G～H—05～06グリッドに位置する。住居址は長辺6.1m、短辺5.1mの隅丸長方形を呈し、長軸方向をほぼ東西方向にとっている。炉は住居址長軸中心線上に奥壁から1mほど内側に設置されており、浅い掘込み上面に粘土を水平に貼った地床炉に類似したタイプである。柱穴は直径40cm、深さ40cm前後の不整形円形ピットで、4本主柱穴であったと推定される。また、住居址南西コーナーには、小ピットが1基存在する。

遺物は、270点余りの土器片が床面直上から覆土内にかけて出土している。復元可能な土器は第9図に図示した6点で、この内1～5は床面直上に押しつぶされた状態で出土してしていることから、住居址廃棄時に使用されていた土器と推定される。出土土器には、壺、甕、高坏、器台などが認められ、器種の認識可能な23個体の土器の内、その比率は各々17%、52%、26%、4%となっている。甕にはS字状口縁台付甕(以下S字甕)5点、単純口縁甕3点、刻み目口縁甕



第8图 III区第14号住居址



第9図 III区第14号住居址出土土器

1点、山陰系有段口縁甕1点があり、甲斐弥生6A期(中山1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題」)の在地型の甕を主体とした煮沸形態の構成から大きく変化していることが理解される。また、S字甕の中には、3・4の様に口縁有段部にクシ状工具による刺突を廻らせ、脚台部内面に折り返しを持たないタイプのS字甕の中でも古相に比定されるものが含まれる。壺は、頸部から肩部が明瞭に屈折し、弥生6A期の壺形態と大きく異なる。また、高坏は、坏部下部に屈折部をもつ稜高坏の大型品で、脚部が朝顔状に外反し3つの透孔を持つ。

これらの出土土器は、尾張地域を中心とした東海西部系の古式土師器の影響を強く受けており、甲斐地域の古式土師器成立に関わる重要な土器群であると考えられる。

(中山誠二)

4) 平安時代の遺構と遺物(Pl.6～Pl.9)

各竪穴住居址は特に東寄りに7軒ほどがまとまって検出されている(Pl.8)。平面プランはいずれもほぼ方形で、規模は最も小さい第9号住居址で2.5×2.8m、最も大きな第6号住居址では4.5×5mであるが、おおむね一辺4m程度である。江戸時代の溝による攪乱のため破壊されているが西壁にカマドがあったと推測される第3号住居址を除き、いずれの住居でもカマドは東壁にある。その材料にはやや粘質な土を全体に利用しているが、まれに袖中心に礫を入れて芯としているものもある。柱穴は確認できない。また、床面の硬化状況はカマド前から反対の壁側に向かって特に顕著な傾向が窺われた。遺物の出土量は全体に少なく、土師器の甲斐型土器が主体である。

Ⅲ区で1棟だけ検出されている堀立柱建物址(Pl.9)は、最も近い住居址からでも13m離れている。この建物は、東西3.5m×南北4mの2間×3間の建物で、南北が桁行となりやや西偏している。竪穴住居址に対し、この建物は平地式の倉庫または居住施設であった可能性が高い。遺物がまったく出土していないために、詳細な時期は不明であるが、平安時代の旧地表面から掘込まれており、該期の遺構と判断される。なお、南東角の柱穴は攪乱により失われている。



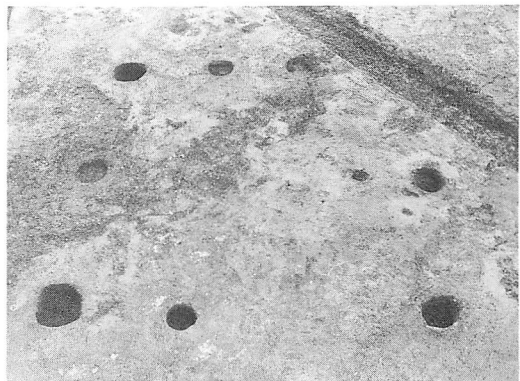
Pl.6 第10・11号住居址



Pl.7 第11号住居址カマド



Pl.8 平安時代の住居址群



Pl.9 第1号掘立柱建物址

5) 江戸時代の遺構と遺物(Pl.10~Pl.13)

Ⅲ区では、溝や土坑がかなり密集して検出されている。溝は、長さ10m以上、幅は数十cmから1mほど、深さは50~60cm程度であるが、平面プランは一様でない。第8号溝から見込みにコニャク版五弁花を持つ肥前系陶磁器皿が出土しており、18世紀前半以降のものであろう。

土坑は、大型と小型の二種に分けられるようである。前者の平面プランは略円形もしくは長方形で、長径2~3m前後、確認面下1.5m前後まで掘り下げたものが多い。こうした土坑が長軸方向に連続して掘られた結果、掘り方が溝状となったものもある(Pl. 13)。同様の土坑は、500~600mほど南の新居道下遺跡でも見つかっており、粘土採掘のための土坑と考えられている(山梨県埋蔵文化財センター 1992『年報8』)。多量の粘土を必要とした瓦生産や土壁の材料として粘土が採取された可能性が高い。覆土には多量の礫が充填されており(Pl. 12)、人為的な埋め戻しと推定される。出土遺物から18世紀代のものと思われる。小型の土坑は、規模を除けば平面プランは他と類似するが、掘り込みがかなり浅く、目的が異なるものであろう。

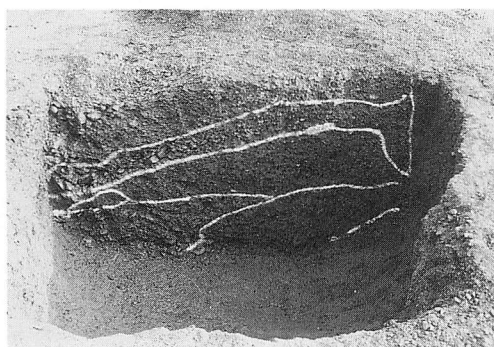
この他、突発的出水で地面が深く抉り込まれた洪水跡がある(Pl. 10)。内面は水流によって交互に左右の壁を抉りながら急激に深度を深めており、最深部は確認面下3m近くに及ぶ。内部は、砂礫によって埋め尽くされている。この洪水跡は江戸時代の第2・3号溝に掘り込まれているため、それ以前かつ平安時代以後に起こったと判断される。(小林公治)



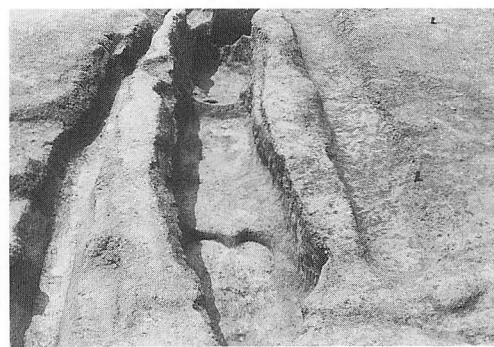
Pl. 10 Ⅲ区江戸時代面全景



Pl. 11 第2・3号溝



Pl. 12 第4号土坑



Pl. 13 第10・11号溝、第20号土坑

8. IV区の遺構と遺物

1) 概要

IV区は中部横断自動車道のインターチェンジ部分に相当する箇所南半分の地区である。文化層は4面にわたり確認された。第1面は江戸時代を主体とする中～近世面、第2面は平安時代、第3面は古墳時代、第4面は弥生時代に比定される。

2) 弥生時代の遺構

(第4図、
Pl.14)

IV区で発見された弥生時代の水田址は、一部Ⅲ区に重複するが、14面を数える。これらは長辺2～5m、短辺2m前後の方形を呈する水田を畦畔が区画するもので、水口と思われる施設も存在する。



Pl.14 水田址全景

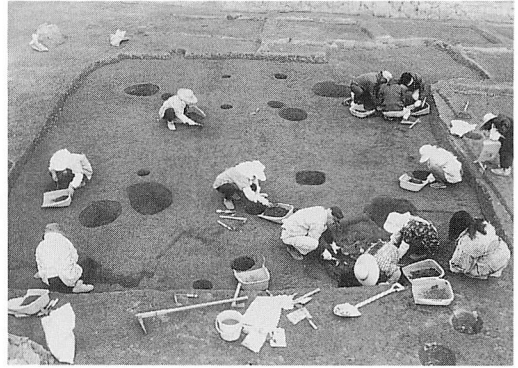
3) 古墳時代の遺構と遺物(第10・11図)

古墳時代では、住居址16軒、掘立柱建物址2棟、溝2条の他、土坑、焼土址などが検出されている。住居址は方形プランとなるものが多く、2.5×2.5mの小型のものから9×8mの大型のものまでその規模は多様であるが、今回のIV区の調査では一辺5m前後の住居が主体となる。

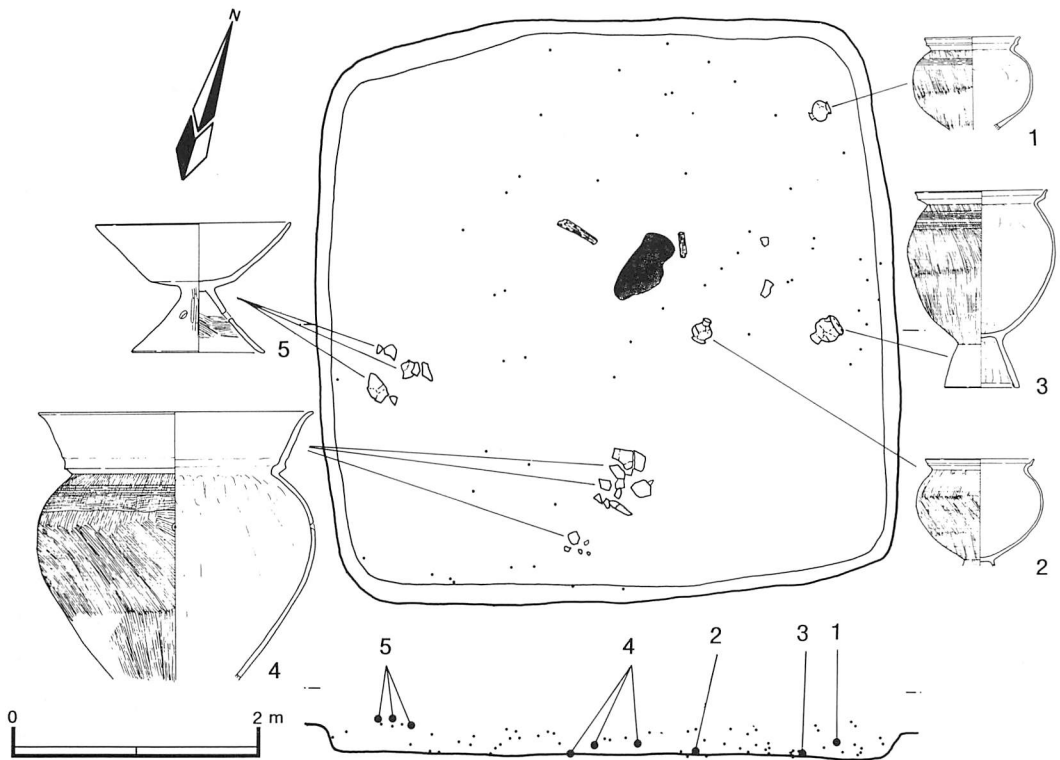
以下では第13号住居址(SI013)を取り上げ、その概要を記す。本址は調査区北側で検出されており、一辺5m弱のほぼ正方形を呈する住居址(第10図)である。炉は床を若干掘込んだ地床炉となり、住居址中央よりやや北側で検出された。柱穴などの他の内部施設は確認できなかった。

遺物の出土状況は散漫で、特筆すべき傾向は見られないが、個体となる資料が5点ほど出土している(第11図)。1～3は濃尾平野を中心とする東海西部地域に祖源を持つS字甕である。1は

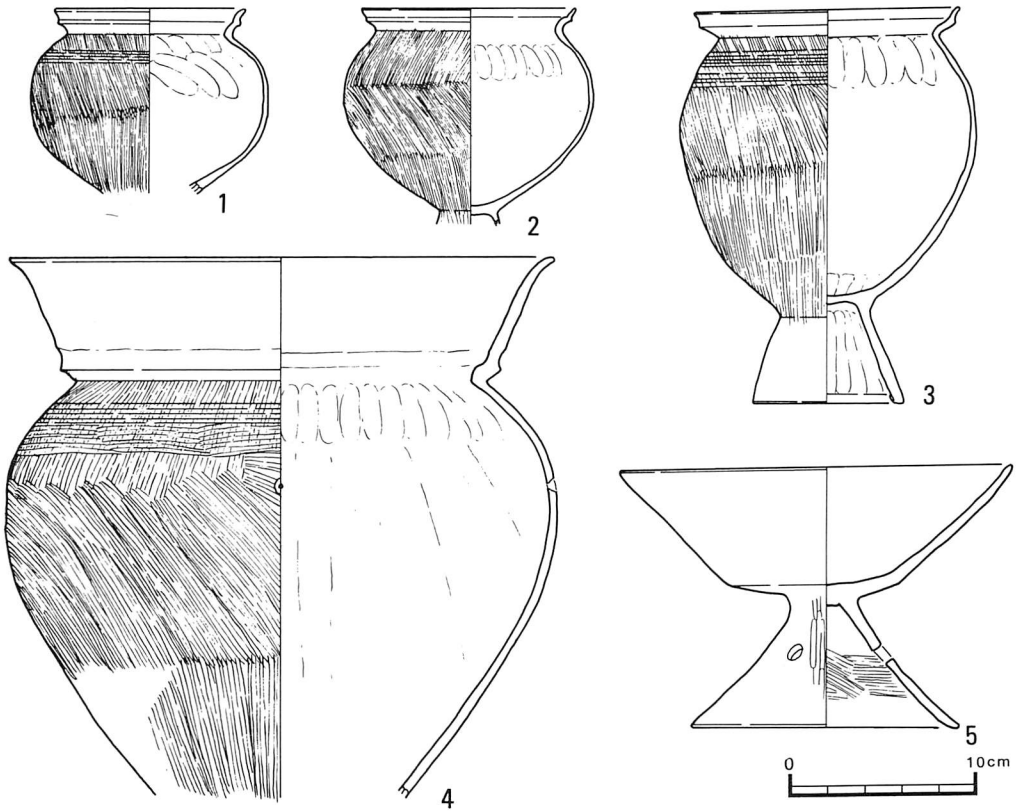
住居址北東部のコーナー付近で床面から約20cm
 上で出土したもので(Pl.16)、底部を破損してい
 る。口縁部は中段が外反し、上段が丸みを帯び
 る。胴部は球形を呈し、上部で横位のハケメ、
 下半部で斜位のハケメが施される。2は炉址の
 西側、床面直上から出土したもので、台部を除
 きほぼ完存する。器形は1に類似するが、胴上
 部の横ハケを持たない。3は住居址西の壁際、
 床面直上から出土したもので、台部から口縁部
 までほぼ完存している。口縁部形態は1・2に
 類似するが、胴部が長胴となり、横位のハケメが2段にわたっている。台部下端部内面が折り
 返される。4は山陰系とされる大型の有段口縁甕で、住居址南側で出土しており、10cm程のレ
 ベル差を持って接合している。口縁部は大きく外反し発達する。胴部は肩の張る器形となり、
 焼成後と思われる穿孔が1ヶ所認められた。5は高坏で住居址西側の床面から30cm程上部で出土
 した。ほぼ完形で坏部下段に稜をもつ。脚部は朝顔状に広がり3ヶ所に円孔が穿たれる。器面の



Pl.15 第9号住居址調査風景



第10図 IV区第13号住居址遺物出土状況



第11図 IV区第13号住居址出土遺物

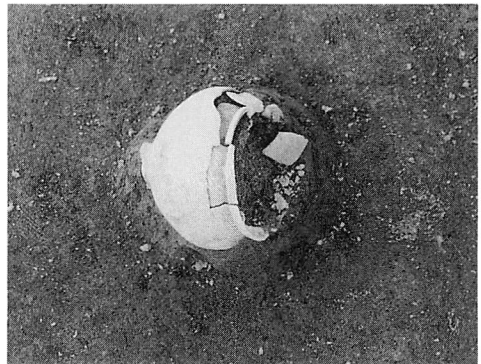
磨滅が激しく坏部の調整は不明で、脚部外面において縦方向のミガキが一部確認された。内面は下端がナデ、中段がハケメ調整される。

掘立柱建物址は2棟確認され、この内第2号掘立柱建物址(SB002)は南北3.5m、東西3m程の2間×3間の建物となる(Pl.17)。

溝は調査区の東西両端で2条検出されている(第5図)。いずれも断面は逆台形を呈し、覆土には砂礫が充満している。

この他、焼土址や土坑なども確認され、土坑の中には掘立柱建物の柱穴の可能性をもつものが含まれている。

これら検出された遺構や、遺構確認面上の黒色遺物包含層からは当該期の遺物が多量に出土している。遺物は壺、甕、高坏、器台などの古式土師器のほか、磨石様の石器がわずかに出土している。



Pl.16 第13号住居址
遺物出土状況

4) 平安時代の遺構と遺物

(第6図、Pl.18)

平安時代面では、住居址3軒、掘立柱建物址1棟が検出された。住居址は一辺が3m前後の方形プランとなり、カマドが東壁のやや南寄りに構築されている。柱穴は掘り方まで精査したが検出されなかった。遺物は土師器の坏、甕の破片がわずかに出土した。



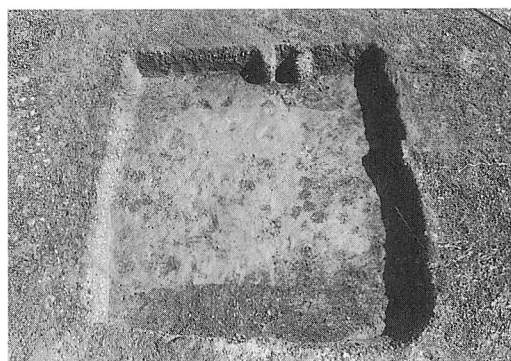
Pl.17 掘立柱建物址

5) 中・近世の遺構と遺物

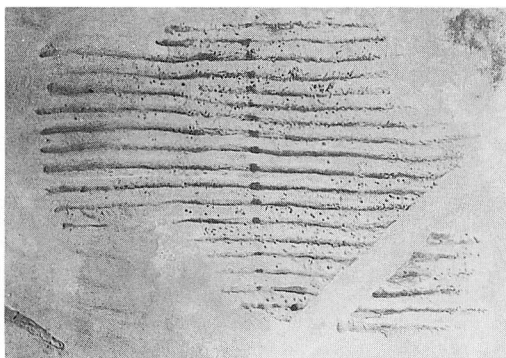
(第7図、Pl.19・20)

該期の遺構は、畠状遺構1ヶ所、溝3条、竪穴状遺構1基である。畠状遺構(SX002)は調査区ほぼ中央で発見され、畝間溝に類似する幅約50cm、深さ10cm、長さ23m程の溝が東西方向に等間隔でのびている。溝や溝間には直径10cm程の小穴が多数検出されている。共伴遺物がないため時期は不明であるが、堆積状況から平安時代後期以降、江戸時代後期以前の遺構と考えられる。

(三田村美彦)



Pl.18 第1号住居址



Pl.19 畠状遺構全景



Pl.20 畠状遺構調査風景

9. 自然科学分析(Ⅰ・Ⅱ区)

1) はじめに

ここでは、昨年度のⅠ・Ⅱ区調査で委託した自然科学分析のうち、カマドおよび炉内土から0.5mm目のフルイによって水洗選別された炭化種実と動物遺体の同定結果について報告する。ただし、炭化種実については、スペースの限界からその概要にすぎないことを断っておきたい。なお、遺構の時期については、カマドのある住居は平安時代(9~10c)、焼土址は古墳時代前期、Ⅱ区の炉のある住居は弥生時代後期である。(小林公治)

2) 炭化種実(第1表)

1. 試料について

試料は、水選篩別され、炭化物のみひろいだされていた。炭化物は実体顕微鏡下で同定可能な炭化物のみを選び出し、分類群を同定した。

2. 出土炭化種実について

カマドから出土した分類群は、いわゆる穀類が多く、なかでもイネを出土している試料が多かった。つぎにオオムギ、コムギ、ムギ類が多く、4ヶ所のカマドからアワ、1ヶ所のカマドからキビを出土している。弥生時代後期の遺構のうち第11号住居址炉からはオニグルミ・イネを、第13号住居址からはシロザ近似種を出土している。(吉川純子)

第1表 Ⅰ区・Ⅱ区出土炭化種子

遺構名	種	オニグルミ破片	堅果破片	ブドウ属	スゲ属	カヤツリグサ科	イネ	オオムギ	コムギ	ムギ類	アワ	キビ	エノコログサ属	イネ科	エノキグサ	キイチゴ属	シロザ近似種	穀類塊
Ⅰ区 SI-002カマドA						1	1		2								2	
Ⅰ区 SI-002カマドB							1											2
Ⅰ区 SI-004カマド				1	2		4	2		2					2		1	
Ⅰ区 SI-004付数遺構			5								1						5	
Ⅰ区 SI-005カマド							7		1		1			6				
Ⅰ区 SI-006カマド							1				2	2						3
Ⅰ区 SI-007カマド							3			1								2
Ⅰ区 SI-010カマド							1			7			1				1	3
Ⅰ区 SI-012カマド							5						1				1	1
Ⅱ区 SI-002カマド																2	1	
Ⅱ区 SI-004カマド											1							
Ⅱ区 SI-007カマド						1	2											
Ⅱ区 SI-009カマド											2							
Ⅱ区 SI-010カマド							2	1	1	2			1					3
Ⅰ区 SF-005焼土址							1											
Ⅱ区 SI-011炉址直上		1					1											
Ⅱ区 SI-013炉址																		2
合計		1	5	1	2	2	29	3	4	12	7	2	3	6	2	2	15	12

3) 動物遺体(第2表)

村前東A遺跡より検出された動物骨様の破片について、分析を行った。供試したのは、I区33サンプル、II区10サンプルで、資料の採取位置はほとんどがカマドであり、他に若干の焼土址・炉址がある。これらのうち、確実に動物骨であると判定できる資料が含まれていたのは、I区 No.52(01T15No.8855)、II区 No.6(SI-007カマド)、No.11(SI-010カマド)、No.12(SI-010カマド)の4サンプルであった。その他、計16のサンプルより骨の可能性のある破片が検出されているが、小破片のため断定できない(第2表)。他の資料は、いずれも砂粒、パミス、灰の小塊などであり、骨は含まれていなかった。

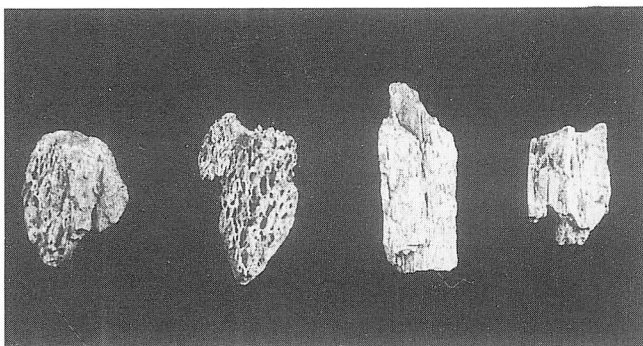
骨と判定された資料はすべて強く被熱・白色化し、細片となっている(Pl. 21~24)。II区 No.12の資料は形態、骨質、骨の厚さから見て、哺乳類の長骨破片と判定されるが、より詳細な同定は難しい。I区 No.52、II区 No.11についても、不明確ながら哺乳類の可能性が高い。II区 No.6 は小破片のため詳細は不明である。

(樋泉岳二)

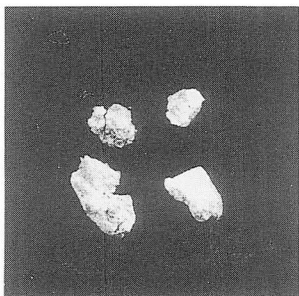
第2表 I区・II区出土
動物遺体

区-No.	遺構名	遺体
I-6	SI-004カマド 4層	?
I-17	SI-005カマド 4区	?
I-19	SI-006カマド 1層	?
I-26	SI-007カマド 1層	?
I-28	SI-007カマド 4区2層	?
I-40	SI-010カマド 3層	?
I-42	SI-010カマド 2区	?
I-44	SI-012カマド 2層	?
I-50	SI-012カマド 3区	?
I-51	SI-012カマド 4区	?
II-6	SI-007カマド	網不明
II-7	SI-008カマド	?
II-8	SI-009カマド	?
II-9	SI-009カマド ①	?
II-11	SI-010カマド	哺乳網?
II-12	SI-010カマド No.958	哺乳網
I-52	01T15 No.8855	哺乳網?
I-55	SF-003焼土址	?
I-57	SF-005焼土址	?
I-58	SF-006焼土址	?
II-13	SF-011炉址2層	?

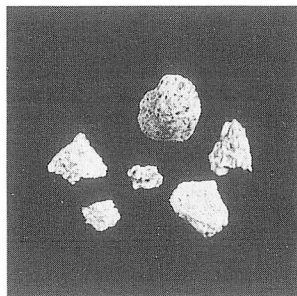
* ? : 骨の可能性あり。



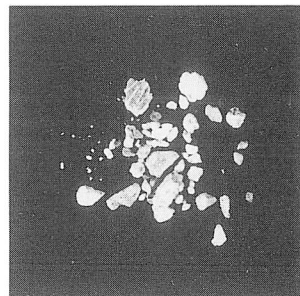
Pl. 21 II区 No. 12 (×1.5)



Pl. 22 I区 No. 52
(×1.5)



Pl. 23 II区 No. 11
(×1.5)



Pl. 24 II区 No. 6
(×1.5)

調 査 組 織

調 査 主 体 山梨県教育委員会
 調 査 機 関 山梨県埋蔵文化財センター
 調 査 担 当 者 中山誠二(山梨県埋蔵文化財センター主任文化財主事)
 小林公治(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)
 三田村美彦(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)
 佐野和規(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)

作業員・整理員 秋山悦子、秋山昭二、秋山長平、秋山みずゑ、秋山よし子、芦沢留市、芦沢ひろ江、芦沢八千子、芦沢よし子、雨宮朝子、飯室菊美、石井関造、石川茂子、石川房男、井上九二雄、井上ことじ、井上静、井上時男、井上文一、井上正子、上田重喜、内田修一、鰻池定一、大木和雄、大木和美、大木つね子、大森朝市、大森ユキエ、大森玲子、小沢一枝、小田切千麻、小野嘉雄、小野節子、垣内律子、河西武子、河住照雄、河住ふさ子、小池和豊、河野トク、河野義一、小林将子、近藤舞、斉藤いつ子、佐久間篤子、桜林豊、佐塚金作、佐塚トラヨ、鮫田進、沢登タツエ、志鎌紀子、清水友美子、白川綾、杉田彰夫、杉田一雄、杉田茂一郎、鈴木みつ子、瀬戸明香、仙洞田しづえ、立川なつじ、田中新吾、千野ふみよ、千野良男、戸沢江美子、内藤孝子、内藤春江、中村満佐子、名取清子、野中つね子、浜辺きみ子、原田佳子、樋口しげ子、平出恭代、深沢照明、深沢朋次郎、深沢初江、深沢はる、深沢三千雄、深沢貢、保坂静夫、保坂よし、保坂よ志美、堀内婦志江、松井俊雄、望月厚子、望月いよ子、望月里子、望月忠、望月利雄、望月とめ子、八木勝枝、安原敏夫、山本文子、依田成美、若菜永子、渡部さつみ、渡辺洋子

協力者・機関 櫛形町教育委員会、若草町教育委員会

報 告 書 概 要

フリガナ	ムラマエヒガシアイセキガイハウ2	
書名	村前東A遺跡概報2	
副題	一般国道52号(甲西道路)改築工事・中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査(Ib区・IIb区・III区・IV区)	
シリーズ	山梨文化財埋蔵センター調査報告書 第103集	
著者名	中山誠二・小林公治・三田村美彦・佐野和規	
発行所	山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京第二建設局	
編集機関	山梨埋蔵文化財センター	
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL0552-66-3881	
印刷所	(株)少国民社	
印刷日・発行日	1995年3月22日・1995年3月30日	
ムラマエヒガシ村前東A遺跡	所在地 山梨県中巨摩郡櫛形町十五所 25000分の1地図名・位置・標高 小笠原 北緯35°37' 東経138°29' 標高280m	
概	主な時代	Ib区：古墳時代前期、平安時代 IIb区：古墳時代、平安時代、中近世 III区・IV区：弥生時代、古墳時代前期、平安時代、中近世
	主な遺構	Ib区：古墳時代一壜穴住居址1軒、土坑、ピット群、溝 平安時代一溝 IIb区：古墳時代一壜穴住居址3軒、焼土址5ヶ所、土坑、溝 平安時代一壜穴住居址2軒 中近世一土坑、溝 III区：弥生時代一水田址 古墳時代一壜穴住居址16軒、掘立柱建物址3棟、焼土址、ピット、溝 平安時代一壜穴住居址12軒、掘立柱建物址3棟、溝 中近世一土坑、溝、畠状遺構 IV区：弥生時代一水田址 古墳時代一壜穴住居址15軒、掘立柱建物址2棟、焼土址、ピット、溝 平安時代一壜穴住居址1軒、掘立柱建物址1棟 中近世一畠状遺構、溝
要	主な遺物	Ib区：古墳時代一土師器 平安時代一土師器、須恵器 IIb区：古墳時代一土師器 平安時代一土師器、須恵器 中近世一陶器 III区：古墳時代一土師器、動植物遺体 平安時代一土師器須恵器、動植物遺体 中近世一陶器 IV区：古墳時代一土師器、動植物遺体 平安時代一土師器
	特殊遺構	近世の粘土採取坑
	特殊遺物	古墳時代手焙型土器
	調査期間	1994(平成6)年4月13～12月26日



山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第103集

1995年3月22日 印刷
1995年3月30日 発行

むら まえひがし

村前東A遺跡概報2

一般国道52号線(甲西道路)改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(Ib区・IIb区・III区・IV区)

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根 923
TEL 0552-66-3881
発行 山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局
印刷 (株)少国民社